

Q 1

最近では、ITC が体験授業等でもかなり普及しており、それに関して今後の調査の予定はあるか。また、不安要因を軽減するため、その強い動機づけが関連するといったことがあるか。

A 1

今回の調査対象の学校は日常的に ITC 活用をしている学校を敢えて選んだが、先生からの意見をまとめると、ITC 活用を始めたことに関しては校内のテーマに決まったこと、そして日常的な使用に関しては、教室に常設されたこと、また学校の先生にすぐ聞けることが大きなきっかけとなったようである。大きく、教室と人の二点が日常的に使用するきっかけにはなっている。

Q 2

これから先生になろうとしている人たちの教育現場では、もうそれが前提のコースになっているのか。それとも先生になる人たちにはまだ同様の教育がなされており、出てから学ぶのか。

A 2

教育学部など、これから先生になろうという大学生に関しては、情報活用の授業が必修科目になっており、富山大学や横浜国立大学など、大学内でも普通教室を再現し、そこにデジタルテレビ、実物投影機、デジタル教科書、タブレットPCなどを置いて、実際に授業を行っている。

Q 3

教育現場で ITC を推進していくのは、校長先生などの上の人ではなく、新任の人たちが押し広めていくといった形も出てくると想定されるが、そのような事例はあるか。

A 3

若い人は使用への抵抗感が減るが、ただ学校現場の ITC 環境は学校一律、教育委員会一律で環境が整備されてしまうため、モノの不足という現実がある。一方、自分のPCやタブレットPCを教室に持ち込んで授業をしている先生もいる。

Q 4

研究としてのスタンスは最終的に何を指そうとしているのか。量的に議論ができておらず、いまひとつ特性に欠ける。情報共有はいいのだが、絶対的に何らかの尺度を用いて議論しなければ重要性がなくなるため、全体のフレームワークをどうするのか考えるべき。

A 4

今回は事例研究ということで事例の一部を紹介した。他の学校も調査し、ITC 活用が促進される要因の中で、「校内での情報共有」の有無で「使用容易性」や「有用性」、「使用への態度」大きく変わると考えている。したがって「校内での情報共有」に着目して、さらにどのような情報共有がされていけば活用が促進されるのかという点を今後見ていきたい。また、「校内での情報共有」に関しては、量的調査の必要性も感じているため、アンケート調査なども実施していきたい。さらに全体のフレームワークをはっきりさせるように研究を進めていきたい。

Q 5

ネットワークがますます広がる世界に巣立っていく小学校の生徒が、この ITC を使った授業によって、ITC の可能性に気づいた上で授業を受け止めていくようなことまでを想定した動機づけを考えることができるのか。逆に、色々な機材やツールが普及していく中で、実際に星を見る体験はないが、ITC を用いた授業で星を見ているということが教育効果としてはどうなのか、教えて欲しい。

A 5

日本の公立小学校の授業では、先生が主導で授業を進めていくのが従来のスタイルであり、子ども 1 人一台 ITC を持っても、先生が前に立って説明するのは変わらない。ただこのタブレット PC の中で子どもたちが考えたりなにか作ったりしたものを、前の電子黒板などに提示して、子ども自身が説明するような機会は増えている。また、夜の星の件は、どうしても学校側には制約があるため、これを敢えて ITC で代用するというのが、ある意味で ITC の良い使い方なのではないかと考えている。

Q 6

ITC の使用、不使用ではどれくらい生徒側の学習効果が変わるかに関する研究は進んでいるか。

A 6

例えば ITC を活用した場合としなかった場合、文科省の調査では、ITC 活用群の方がテストの得点が高くなるほか、調査対象の教師の 90%以上が「授業の質が向上した」という意見が見られる。他方で先行研究などでは、指導が効率化するという研究結果が出ている。